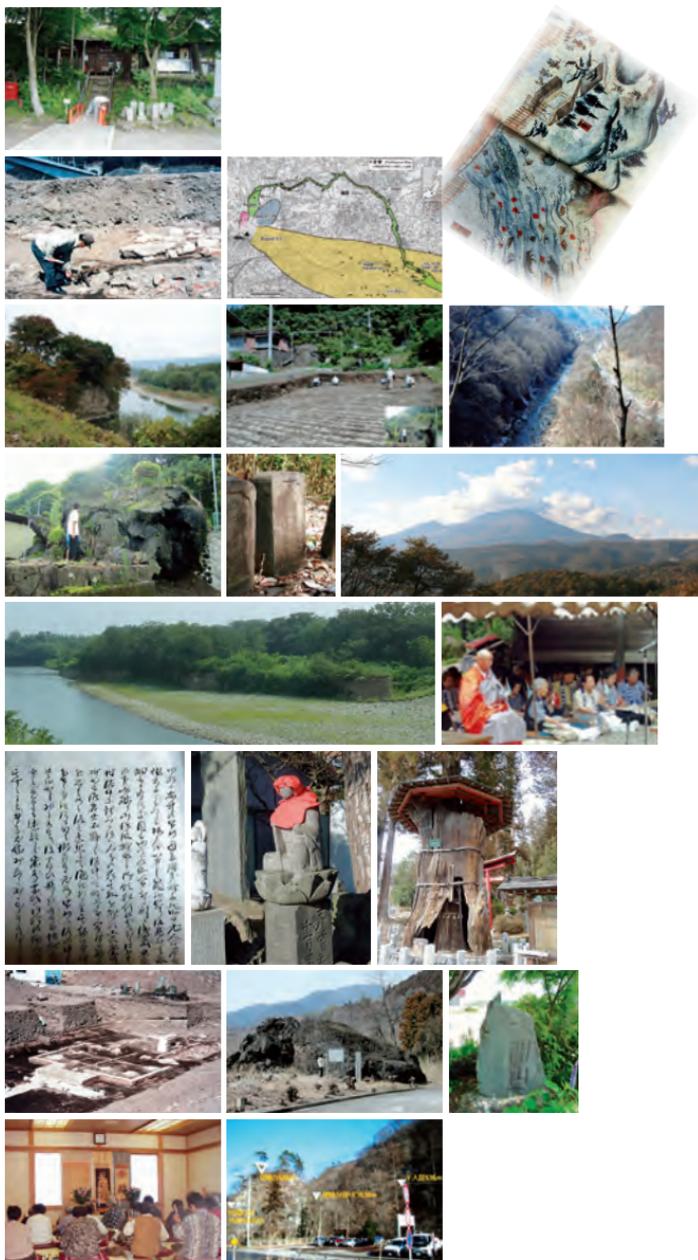


1783 天明泥流の記録

— 天明三年浅間山噴火災害・泥流の到達範囲をたどる —

関 俊明・小菅尉多・中島直樹・勢藤 力



みやま文庫

はじめに

子どもの頃から親しんでいる上毛かるたで、「浅間のいたずら鬼の押出し」の絵札は、天明三年の浅間山噴火で「押し出された」溶岩をモチーフにしているという。しかし、押し出されたのは、奇観として知られる火口湧出の「鬼押出溶岩」だけではなかった。上州側に甚大な人的被害をもたらした「浅間押し」の正体は、山麓周辺の既存の土砂の移動現象だった。移動をはじめた土砂は鎌原村を襲い、吾妻川に入り込んで天明泥流として吾妻川、利根川沿岸を呑み込んでいった。繰り返しになるが、それは火口から流れ出た溶岩ではなかったのだ。

では、その土砂移動はどこで発生したのか。その跡地は、火口から流れ出た溶岩が、埋めてしまっているのだという考えが、今日定着しようとしてつつある。

昭和五四年にはじまる「鎌原村」の発掘調査では、村を埋めつくした土砂は常温であったことが認識された。それまで「高温の溶岩流」とか「灼熱の熱泥流」などといわれてきた土砂移動の実態が示されるようになった。

古絵図には、泥の流れの中に一部真っ赤に焼けた「火石」が朱色で塗彩されている描写がある。常温の流れの中に高温な溶岩が混じった流れが、吾妻川、利根川筋を流れ下った。一五メートルを越え

るような巨礫が今も川筋に残されていて、それらが土砂の流れの中で担ぎ上げられているかのようにして流下していたことも、この二〇年来沿岸で行われてきた発掘調査から理解できるようになってきた。

わたしたち四人は、天明泥流の到達範囲を現地踏査しつつ、地形や伝承をもとにして厳密にたどることができないだろうかと考えた。こうして、流域に残されている天明泥流の痕跡を中心に、地点情報を集約する作業を重ね、できるだけ詳しい地形図に到達範囲のラインを引き込んでいくことにした。もちろん推定に依る部分も多いのだが、それらは今後の課題として下流域から進めてきた。地点ごとに集めた情報を取り込む作業は、結果的に、玉村町域から長野原町域分までをほぼ網羅することになった。孀恋村域については、時間と対象域のボリュームの関係で、本書の中では概要的に扱うに留めた。

本書は、これまでに群馬県埋蔵文化財調査事業団の研究紀要等にまとめてきた踏査の結果を再構成し、上流域から市町村を単位として章立てした。本文については、各流域範囲の項目をコラム的に取り上げるにとどめ、これまで書き留めたものをもとに分担して執筆した。掲載分量の関係で写真や資料、文献等について、本書では主なもののみ掲載した。詳しくは、それぞれをたどっていただければ幸いである。また、天明三年関係遺跡の一覧を付記した。これは、本書掲載に向けて、同時進行で進めた成果でもある。歴史災害に見舞われた「天明三年遺跡」であるが、近世

の災害跡を掘り返すという群馬で行われる特徴的な発掘調査であり、火山災害遺跡として原因解明や同一時間軸で遺構を読み取ることができる遺跡としての特殊性も持ち合わせている。

今回、「みやま文庫」に扱っていただけでなく機会を授かったことで、歴史災害の記憶を記録として地域に残していつてもらえることに感謝したい。さらに、防災・減災論が叫ばれる昨今、これを足掛かりとして、災害の記憶を基軸に据えた地域発展につなげられる題材にしてもらえたら望外の喜びと考えている。

目次

はじめに

序章 天明三年浅間山噴火と災害のあらまし

一 浅間山と天明三年浅間災害……………三

二 降灰の記録……………六

三 天明泥流の流下……………九

四 落合での出来事……………二一

五 史料に記述された天明泥流の特徴……………二四

六 天明泥流の発生の問題点と土砂総量の試算……………二七

第一章 孀恋・長野原流域

一 鎌原村の発掘調査と孀恋村の地点情報……………三二

二 上流域の埋もれた分限者の居宅跡……………三四

三	吾妻溪谷の堰上げの問題点	二七
四	長野原町の地点情報	二九
	孀恋村・長野原町域における天明泥流到達範囲図①・②・③	四〇

第二章 東吾妻町・中之条町流域

一	久兵衛の目撃談と一番、二番開発	五三
二	中之条で目撃された「一ノ浪二ノ浪三ノ浪」と段波	五五
三	流域の「浅間石」	五七
四	東吾妻町・中之条町流域の地点情報	五九
	(一) 吾妻川右側	五九
	(二) 吾妻川左岸側	六七
	東吾妻町中之条町域における天明泥流到達範囲図①・②・③・④	八四

第三章 渋川流域

一	へだまの木	九三
二	杓ヶ橋の関所	九五